

「中日禅学研究研討会」報告

北京大学において禅学に関する学術シンポジウムが今年3月末に5日間にわたって開催された。すなわち1989年3月27日から31日まで「中日禅学研究研討会」(正式な名称)が開かれ、充実したスケジュールをよくこなし大きな成果を収めて盛会裡に大会を終了した。本会を主催したのは、北京大学哲学系と駒沢大学仏教学部である。日本と中国の国際交流とりわけ駒沢大学は北京大学との国際学術交流について、その第一歩を踏み出すという役割は、曲りなりにも果たしえたのではないかと考える。これも関係各位のご尽力の賜物にほかならない。

この会が開催されるに至った経過についていえば、北京大学の樓宇烈教授が東京大学の招きで来日された1987年7月、曹洞宗宗学研究所主催の講演会が本学で行われてからである。樓教授のもとでは、すでに中条道昭講師が学ばれ、また当時は、在学中ながら国費留学生として博士課程の小川隆氏もお世話になっているということもあって、爾来、個人的には文通もあり両国の仏教を研究するものが相寄って、共に研鑽したいという機運が高まりつつあったのである。そのような中で、中条講師が仲介の労をとられたので話が急速に具体化し、大学当局(平井副学長)および仏教学部教授会のご賛同をも頂いて予定どおり「中日禅学研究研討会」開催の運びとなったのである。

研討会は、春まだ浅い北京大学の電化教室楼で行われた。手順は、日本側の参加者が一日1人ずつテーマにそって発表を行い、それに対して中国側の参加者が質問し、あるいは、意見などを述べるというものであった。このように書くと通常の学会と変わらないのであるが、朝8時半から12時近くまでが発表、昼食後1時半から4時半頃までが質問で、ともかく通訳の時間を割り引いても、一人で3時間は話すという極めてハードな学会であったことは間違いない。

両国の参加者は次のとおりである。

〈日本側〉

岡部和雄 田中良昭 石井修道 大谷哲夫 永井政之(以上発表者) 阿部肇一 峰岸孝哉 中条道昭 小川 隆(駒沢大学大学院) 辛島静志(東京大学大学院)

〈中国側〉

樓宇烈	北京大學哲學系教授，副主任（禪學研究會召集人）
湯一介	北京大學哲學系教授
陳來	北京大學哲學系副教授
魏常海	北京大學哲學系講師
姚衛群	北京大學哲學系講師
金珠英	北京大學哲學系助教
陳繼東	北京大學哲學系助教
陳金華	北京大學哲學系碩士研究生
孫寶印	北京大學哲學系碩士研究生
劉生杜	北京大學哲學系碩士研究生
王邦維	北京大學南亞東南亞研究所副教授
龍新江	北京大學歷史系副教授
丁一川	北京大學歷史系講師
劉金才	北京大學東語系講師，日本文化研究所研究員
金勳	北京大學東語系教員
楊曉捷	北京大學東語系講師
石峻	中國人民大學哲學系教授
方立天	中國人民大學哲學系教授
邢東風	中國人民大學哲學系博士生，助教
杜繼文	世界宗教研究所研究員
楊曾文	世界宗教研究所研究員，佛教研究室主任
王志遠	世界宗教研究所助理研究員
方廣錫	亞太研究所副研究員
淨慧	中國佛協常務理事，河北省佛協會長，《法音》月刊主編
史平	中國佛教文化研究所
周武	中國佛教協會《法音》月刊編輯
純一	中國佛教協會《法音》月刊編輯
高振農	上海社科院宗教研究所副研究院
業露華	上海社科院宗教研究所助理研究員
王雷泉	上海復旦大學哲學系副教授，副系主任
洪修平	南京大學哲學系講師
呂有祥	武漢大學哲學系講師
暢耀	陝西省社科院副研究員
陳景富	陝西省社科院助理研究員

王慶叔	敦煌研究院
哀徳領	敦煌研究院
崔正森	山西省社科院副研究員
李克域	承德文物局副研究員
黄夏年	《世界宗教研究》編輯
呉 華	世界宗教研究所実習研究員
何勁松	世界宗教研究所博士研究生
魏道儒	世界宗教研究所博士研究生
邱高興	世界宗教研究所碩士研究生

以上は、正式な招待状が送られた人々であるが、このほかにも大学院クラスの若い人々の参加があり、常時40人から50人が会場を埋めていた。

著書などを通じて名前は知ってはいても、ほとんどが面識のない人ばかりであったが、初日、2日目と日が経つにつれて顔馴染となり、わずかな休憩時間の間にも中条氏や小川氏、辛島氏の通訳を介して議論に花が咲くようになったのは望外のことであった。ともかく結果としては、日本側のみが発表しそれに対して中国側が自分の意見を披瀝しつつ、かなり長時間にわたって質問を行うといった形式で、1問1答が通例の日本の学会とはずいぶん様子の違ったものとなった。初めは何を質問されるのかといった不安もあったが、相手の意見を聞きつつ答えるという時間的な余裕もあって、彼我の立場、方法論の違いをハッキリ認識できるというメリットも感じたのである。

討論を通じていくつかの問題点が明らかとなった。

まずチベットの仏教をどのように位置づけまた評価するかという点である。この点は、筆者と石井教授の発表をめぐっての質問に端的に表れていたように思う。ただし質問の傾向は、その思想を細かく分析したうえでのものではなく、「歴史的に見てもチベットは中国である。だからチベット仏教は中国の仏教の一部として叙述を進めるべきである」という原則論であり、チベット仏教研究の新しい成果を積極的に評価しようとする日本側の主張とは平行線をたどった。

田中教授の発表された敦煌の禅籍については中国側も関心を寄せ今後の相互協力が約されたが、「禅宗」の成立をいつからと見るかという問題では、馬祖以降とする田中教授と、東山法門以降とする中国側との間に意見のちがいが認められた。

永井助教授による、三教一致を認めるかどうか中国と日本の仏教を分けるという意見には、おおかたの賛同が得られた。

大谷教授は今回ただ一人、日本仏教をめぐっての研究状況を報告されたが、特に自身の寺院生活の体験をふまえた上で現代日本仏教をも問題とされたので質問が集中し、中国側の関心の強さが感じられた。

以上、北京大学における学術シンポジウムの大綱について報告するにとどめる。

〔なお、本会に関する詳しい報告がすでに発表されているのでそれをご参照願いたい。石井修道「北京大学の日中禅学研究討論会に参加して」(『中外日報』4月25日・26日・27日、5月1日・2日)、田中良昭『駒沢大学学園通信』165号(7月10日)〕

考えてみれば日中の学者が、一堂に会してこれほど真剣に中国仏教をテーマに論じたのは長い両国の交流の中でも数少ないのではないか。そのような機会を与えて下さった、楼教授をはじめとする中国側の諸先生に深甚なる感謝を捧げるとともに、北京大学と駒沢大学の交流が今後より一層の発展を遂げるよう願ってやまない。なお追記するなら本稿はそのすべてが中国仏教協会による『仏教文化』にも中国文で掲載されることになっている。(岡部・永井)